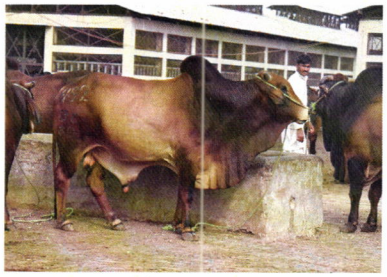
パキスタン国と家畜の魅力

会員　冨永　秀雄*

報告者は発展途上国で約40年に渡りJICA専門家として熱帯の家畜、特にコブ牛の開発に関わってきた。縁があり、現在、パキスタンイスラム共和国（以下パ国と呼ぶ）の畜産開発に携わっている。プロジェクト名は、「パ国シンド州持続的畜産開発プロジェクト」というJICAの技術協力プロジェクトで、実施サイトはパ国の南東部に位置するシンド州である。州都はカラチでプロジェクト事務所はそこから車で約2時間のハイデラバードである。この紙面をお借りし、パ国の畜産と家畜の魅力、その美しさを紹介する。

パ国は1947年に英領インドより独立した比較的新しいイスラム教国である。隣の大国インドはヒンドゥー教徒が多く、ご存知のように牛は神聖な動物として崇拝の対象なので牛肉は食べない。一方のパ国は97%がイスラム教徒なので牛は御馳走だが豚肉は食べない。パ国はインドの北西に位置し、インドと比較すると小さく見えるが国土面積は79.6万Km2と日本の約2倍もあり、また人口も1億8,000万の大きな国である。

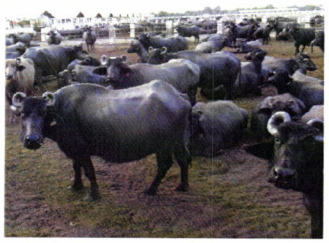
家畜が多く、牛、水牛、山羊、緬羊、ラクダそしてロバが至る所に繋がれ、放牧され、家畜好きの私を興奮させてくれる。日本の牛の飼養頭数は約400万頭だがパ国の牛は世界第8位の3,400万頭、そしてこの多くは熱帯牛で別名コブ牛、ゼブー牛と呼ばれている。日本でおなじみの黒白斑点の乳牛はホルスタイン種と呼ばれ、また良く知られている肉牛のヘレフォード種そしてアンガス種は温帯牛、別名ヨーロッパ牛と呼ばれている。世界的に家畜牛は大きくこの熱帯牛そして温帯牛の2タイプに分かれているが、約1万年前に「肥沃な三日月地帯」のイラク、ヨルダン、シリア、イスラエルの同じ場所で少し時期がずれる形で飼われ始めたことが最近のDNA調査で解ってきた。紀元前6,400年ごろには西アジアの広い地域で乳が搾られていたらしい。インダス文明の最大級の都市遺跡（現シンド州で紀元前2,600年から紀元前1,700年）にもその痕跡が残されている。パ国のコブ牛もこれからあまり遅くない時期から飼われていたことが想像され、この長い歳月、暑く乾燥した環境の中で受け継がれ、選抜そして環境適応してきた。このような理由でコブ牛は、耐暑性、熱帯の風土病や害虫に対する強い抵抗性を持っている。首の下には長く垂れ下がった胸垂が、そして雄は陰茎部、雌は臍の下の皮膚が垂れ下がり、大変優雅で美しく見える。コブ牛が暑さに強いのはこの弛んだ皮膚による広い体表面積が発汗機能を高めるためである。名前の由来通り、肩の上にコブが盛り上がり、雄のコブは雌よりも大きく、雄をより逞しく力強く見せている。去勢するとそれは少し小さくなるがこのコブの中は脂肪が網目のように詰まっている。雨季に入り草が豊富になるとこのコブは大きく膨らみ、乾季に入り餌の量が少なくなると萎んでくる。インドそしてパ国には多くのコブ牛のオリジナル品種が飼われている。熱帯で仕事をしたことのある畜産技術者なら誰でも知っている有名な乳用品種のサヒワール種とレッド・シンディ種はパ国原産である。



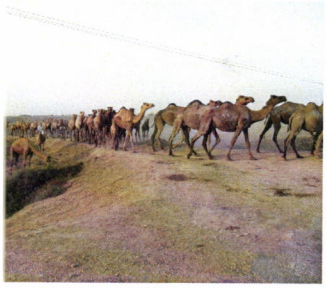
雄瘤牛　サヒワール種

水牛の頭数はインドに次ぐ世界第2位で3,100万頭も飼われている。家畜としての水牛は世界で2タイプが飼われている。沼沢水牛、別名スワンプ水牛は中国や東南アジアで多く飼養され、少し前までは使役され重宝されてきた。しかしながら農業機械が普及した現在、そのニーズが低下し、この頭数は年々減少している。一方の水牛は河川水牛、別名リバー水牛と呼ばれ牛乳を搾るために飼われている。パ国で飼われている水牛は100%がリバー水牛で、何と牛乳生産量は世界5位、3,550万トンである。そしてパ国で生産される牛乳の約70%は水牛乳である。リバー水牛の乳は脂肪分が6～8%と極めて濃縮で美味しい。パ国では農民に可愛がられ慕われている水牛だが隣国インドのヒンドゥー教においては悪魔マヒシャの化身のひとつで死者の王ヤマの乗り物とされ蔑まれ気の毒な家畜となっている。ヤギは世界第3位の6,000万頭、羊は世界第9位の2,800万頭、ラクダの多くはヒトコブラクダで100万頭と大変な数の家畜が飼われている。その形態、能力そして毛色も様々な品種の多くはパ国固有の原種であり私を魅了して止まない。写真をご覧頂き、熱帯の家畜の魅力を皆さんと分かち合えたら幸いである。

（パキスタン国ハイデラバードより）



乳用水牛　クンディ種の群れ



若いラクダの群れ　ダッティ種

*とみなが・ひでお　専門分野:獣医師、畜産開発、農業開発、生活改善　任地（JICA）ボリビア、マダガスカル、インドネシア、ニカラグア、パキスタン　任地（JICA以外）中国、ケニア、エチオピア

編集後記

今号は、今期のJECK運営方針、Facebookによる国際交流、ダッカでのリキシャレース計画・実施の経緯、14年間に及ぶフィジー草の根プロジェクトの集大成、夏季シンポジュウム、パキスタンの家畜等多岐にわたる興味深い寄稿がありました。いずれも労作の為文字数が多くなり、やや読みにくいかと心配しています。少しでも読みやすくするために、Universal Design 手法から、フォントを従来の明朝体からゴシック体に変更しました。また、脚注に執筆者のプロファイルを記載しました。（大平一昭）

JICA帰国専門家連絡会かながわ会報　第23号
発　行　2014年10月1日
発行者　JICA帰国専門家連絡会かながわ（JECK）
事務局　横浜市中区新港2-3-1
JICA横浜国際センター3F　国際協力連絡室内
URL:http://www.jeck.jp/
事務局長 肥後 照雄 e-mail:t_higo@cb3.so-net.ne.jp
0463(55)6747
編集委員会　植岡 龍太郎（編集責任）
大平一昭、佐藤満寿哉、小泉由紀子
印　　刷　横浜リテラ　URL：http//www.yokohamalitera.com/
e-mail：info@yokohamalitera.co.jp
横浜市戸塚区上矢部町1965-4